

問題・解答  
用紙番号

57

の解答用紙に解答しなさい。

## 国 語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、  
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は100点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

(10点)

- 1 裏庭をクツサクしたら温泉が湧き出た。  
ア 犯罪を減らすためのタイサクが必要だ。  
イ 絶滅危惧種のタンサクが今も続いている。  
ウ 新事業への期待と不安がコウサクする。  
エ 悪徳企業が労働者をサクシユする。  
オ 地方自治体が経費のサクゲンに乗り出した。
  
- 2 夏の海はカイホウ的な気持ちにさせる。  
ア この森の奥でキカイな事件が起こった。  
イ あのビルは地震でハンカイした。  
ウ サケヤマスは生まれた川にカイキする習性がある。  
エ 問題行動を繰り返さぬようジカイする。  
オ 連続ドラマがどのようにテンカイするかが気になる。

- 3 犯人はアリバイのうそが暴かれてドウヨウした。
- ア 敵チームのヨウドウ作戦を見破った。
- イ 子供の時は成績が良く、シンドウと呼ばれた。
- ウ 日本社会の外交問題をドウサツする。
- エ ロウドウ者の権利を守る。
- オ 人類は古代からセイドウ器を活用してきた。
- 4 おおきな問題に直面してコンワクした。
- ア 同業者たちとコンダンする。
- イ シンコン生活を楽しみにする。
- ウ その寺院は七世紀にコンリユウされた。
- エ ノウコンのスーツを着る。
- オ 物価上昇が続き、経済的にコンキユウした。
- 5 権威ある学説をトハンする。
- ア 妻をドウハンして映画を観に行く。
- イ 大学祭の屋台で弁当をハンバイする。
- ウ 卒業試験の合否についてハンテイがなされる。
- エ 夕暮れに、コハンの道を散歩する。
- オ 大学生としてのモハンを示す。

**II** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

チンパンジーをイメージしながら考えてみよう。重要なので詳しく説明すると、まずはチンパンジーに、鏡像自己認知ができたと思われるまで、長時間鏡を見せる。次に、気づかれないように本人には直接見えない額に印をつける。本人には額は見えないので、印は見えない。印には匂いも刺激もないので、本人は鏡を見ないと額の印はわからない。印をつけ終わってから、実験個体が額の印に気がつかないことを確認する。確認後、このチンパンジーにもう一度鏡を見せるのである。もし本人が鏡を覗き込んで、試行錯誤することなく自分の額の印を触ったのなら、自分の額にこれまでなかった変なものがついていると認識したことを示している。鏡像が自分だと認識していることが示されたことになるのだ。

これだけのことであるが、この動きは鏡像が自分であると認識してはじめてできる行動であり、自己認識の証拠になる。印が鏡の中の個体についていると認識したのなら、自分の額ではなく鏡像の印を触ろうとするはずだ。迷わず自分の額を触るのは、鏡像は自分であると認識している、つまり鏡像自己認知している証拠である。

ギャラップ教授は、若くて鏡を見たことのないチンパンジー4個体を対象にこの実験を行った。4頭ともはじめは鏡像に威嚇したり、大声をあげたり、攻撃的であったが、やがてどうやら自分だと認識できるようになったようだ。鏡を覗き込んで自分を観察している。鏡を見せて10日が過ぎ、いよいよ実験を行った。教授はこれらのチンパンジーに麻酔をし、額に赤い印をつけた。目覚めた彼らを観察しても、彼らは額の印に気づいておらず、印を触ることは一切なかった。そこで、いよいよ最終実験である。彼らに鏡を見せたのだ。彼らは鏡が何かを知っており、鏡を見てももう大騒ぎはしない。鏡を覗き込んだあと、なんと4頭すべてが自分の額の印を触ったのである。これは、動物が自分を認識できることを、正確に示すことができた歴史的な瞬間であった。赤い印をつけたこの方法は「マークテスト」や「ルージユテスト」と呼ばれている。

さらに、触った指先をじっと見つめて鼻に近づけ、指についた印の匂いまで嗅ごうとした。これは、自分の額に赤い何かがついており、それを擦って指についた赤いものが何かを調べているのである。この結果は、チンパンジーが鏡に映る姿が自分であることを正しく認識していることを、はっきりと示している。

A  
この結果は、1970年、自然科学では世界の最高峰の科学雑誌のひとつである『Science』に3ページの論文として掲載された。さらに、ギャラップ教授は、鏡像が自分であることを認識するには、自分の姿のイメージを持続的に持つていなければならないと主張した。実験対象のチンパンジーが鏡をはじめて見たときには自分の姿のイメージを持つておらず、鏡像を見知らぬ他個体と見なしたわけだ。 **a**、マークテストに合格するころには画像として記憶した自分のイメージ

がここにあり、それと見比べて鏡像が自分であることを認識し、さらには自分に赤い印がついていることを認識するのだ、と彼は考えた。

教授自身も書いているように、この研究は、人間に近い動物が自己概念を持つことをはじめて実証的に示した研究である。チンパンジーの精神的内面が、これまで思われてきた以上に、はるかに人間の内面に近いことが示された。その後、チンパンジーの言語能力や様々な認知能力が明らかにされてきたが、この発見は当時としては画期的だった。人間以外の動物も、自己を振り返り自己を認識できる可能性が出てきたのである。

大型類人猿のうち、チンパンジーはヒトに最も近い。ヒトとチンパンジーが共通の祖先から分かれたのは約700万年前である。では他の霊長類はどのようなだろうか？ ギヤラップ教授は同じ論文で、アカゲザルなどについても報告している。アカゲザルやニホンザルはオナガザル科に分類され、彼らはヒト科と2500万年前までに分かれたとされている。これらのサルは、鏡像をいつまで経っても自分だと気づく様子もなく、ギヤラップ教授は、アカゲザル類は鏡像自己認知ができな<sup>B</sup>いとの結論を下した。つまり、自己認識能力や自己概念という高度な認知は、類人猿の段階になってから獲得されたものだろうと推測した。

その後当然ながら、様々な霊長類でマークテストが実施されていく。類人猿では、オランウータン、チンパンジーに近いボノボでできることが確認された。しかし、系統的にはオランウータンよりもヒトに近いゴリラではなかなか確認されなかった。このため、ゴリラが鏡像自己認知できない理由が数多くあげられ、相当に議論がなされた。

どうやらその真相は、ゴリラ自身の社会的習性にあるようだ。彼らは面と向かって相手の顔をまじまじと凝視することがない。そのため鏡の顔をしっかりと見ることがなく、その認識が難しいようなのだ。最初にゴリラで鏡像自己認知が確認されたのが、幼いころからヒトと生活し、手話でヒトとコミュニケーションをとることのできた雌のゴリラのココであったことは b ではないだろう。ココはゴリラの「しきたり」からかなり解放されていたのだ。その後、他のゴリラでも確認され、ゴリラは鏡像自己認知ができると見なされている。現在ではヒトも含め大型類人猿はすべて鏡像自己認知ができると見なされている。では、その先の祖先はどうだろうか？

系統的には、小型類人猿であるテナガザル類との共通祖先がその先にくる。現在のところ、テナガザル類の鏡像自己認知はできるという研究と、できないという研究が、拮抗している状況である。しかし、注意しておきたいのは、マークテストに合格しないことが、鏡像自己認知ができないことの証明にはならないという点である。私は、テナガザルがマークテストに合格しないのは、それらの実験方法に問題があるからだろうと考えている。

ギヤラップ論文以降、サル類の多くは鏡像自己認知ができないと考えられている。サル類には旧世界のオナガザル亜科、コロブス亜科、南米のクモサル科、オマキザル科、小型のマーモセット科

などが含まれる。これまでのところ、マークテストに合格した種はいないとされているが、できるとする研究も少なくない。ただ、再現実験が難しいのが現状だ。

鏡像自己認知は、霊長類のうち大型類人猿はできる、小型類人猿はできたりできなかつたり、その他のサル類は、ほぼできないというのが、現在の世界の霊長類学者の認識である。このため、世界の多くの人類学者や霊長類学者は、ヒトの自己認識能力の起源は、大型類人猿の段階で進化したとの見方をとっている。このように、動物にも自己認識能力があるといっても、ヒトに近い類人猿だけなのである。しかし、<sup>C</sup>2001年以降、霊長類以外でも、鏡像自己認知の検証例が出てきた。

霊長類以外で、大きな脳を持つ賢い動物といえば、その代表はイルカとゾウである。賢さだけでなく、老齢個体を中心に社会を作り、群れのメンバーを助けたり、相手を思いやりたりするなど愛情の深さでも知られている。

最初に、霊長類以外の動物で鏡像自己認知が報告されたのはハンドウイルカである。イルカの鏡像認知にはいくつもの報告があるが、有名なのは何といっても大きな飼育プールで研究したローリ・マリノ教授らの研究である。イルカは手足や指がなく、マークを触ることができない。さらに動物園での飼育個体のため麻酔もできない。マリノ教授らは、大きな飼育プールで次のような実験をした。

イルカたちをプールサイドに上げ、自分では直接見ることができない頭、喉、背中、腹のどこかにマークを施す。この場合、イルカは何がつけられたのか直接は見えないが、何かがつけられていることはその触覚でわかる。実験用の鏡はマークをつけるプールサイドから30mほど離れたプールの水中の壁につけられており、イルカはその鏡の場所をよく知っている。プールサイドでマークをつけられた後、そのマークを見るために彼らが鏡の前にどのように向かい、どう振る舞ったのかを詳しく調べた。

鏡の前でイルカは、マークの場所が鏡に映るような姿勢をとり、しばらく見ていたのである。対照実験として水でマークをつけた場合でも、マークだと思い鏡の前にすぐに行くが、何もないことを確認するとすぐに鏡の前を離れる。また、プールサイドに上がっても、何もつけないという別の対照実験もしている。この場合、イルカは鏡を見にも行かないのである。何もついていないことがわかっているのだ。

これらの実験結果だけでは、厳密にはマークテストに合格したとはいえないとの批判がある。鏡を見て、自分自身の体のマークを触ったわけではないからである。しかし、マークを見るために、イルカは水中でマークの場所ごとに独特の姿勢をあえて取る。そして水のマークの場合、しばらく見て色が無いのを確認すると、すぐに鏡の前から離れる。これらのことは、自分の体のどこにマークがつけられたのかがわかっていることを示している。つまり自分の体そのものを認識できていると考えられ、イルカが鏡像自己認知できているという考えは、ほぼ受け入れられている。

アジアゾウについては、ニューヨークのブロンクス動物園の3頭で実験がなされた。それまでもゾウに鏡を見せる簡単な実験はなされていたが、うまくいっていなかった。そもそもゾウが鏡に興味を示さない一番の原因は、大きなゾウには鏡が小さく、体の一部しか見えていないということだ。そこで、この実験では縦横ともに2・5 mの鏡が、広い放飼場の壁につけられた。

大きなゾウへの麻酔は、死なせる危険が高くて、とてもできない。そこで研究者がとった方法は、目の上左右両方の額に印をつけることだった。片方は白いマークであり、もう片方は乾いてしまう水である。ゾウはどちらにマークがつけられたかがわからない。だから、もし鏡を見てマークだけをこすれば、つけられた場所を触覚で覚えているのではなく、マークを見て触ったことになる。

結果はどうか。対象個体の3頭すべてが、鏡を見る前には額のマークを触らなかった。そして、ハッピーという雌のゾウが、鏡を見た後に額の白いマークだけを何度も触ったのだ。このことからハッピーはマークテストに合格した、すなわち鏡像自己認知ができると見なされた。

この実験者のひとりであるチンパンジー研究の権威フランス・ドウ・ザアール教授は、ゾウの鏡像自己認知はヒトや類人猿のものとは独立に進化したと考えている。ゾウ、イルカ、類人猿とヒトで、それぞれの社会の進化に応じて別々に発達したとしているのだ。この考えには、私はまったく同意できない。

ともかく、哺乳類で鏡像自己認知ができるのは、その時点では類人猿とイルカ類という脳の大きい賢い動物だけであつたが、この実験により、ゾウがそのメンバーに加わつたのである。類人猿から遠く離れた2つの系統へ、自己認識能力の幅が広がった。

さらに、2008年に出された論文で、カラスの仲間のカササギでマークテストの合格が報告された。調べられた5羽のうち2羽が合格している。カササギの実験では、自分では直接見えない場所として、喉に小さな色付きのシール（赤・黄・黒）が貼られた。喉であれば、クチバシで触ろうとしたり、足で引つかいたりできるからである。他の動物のように額にマークをつけたとしても、クチバシでは触れない、足も届かないとなると、マークがわかつていても触れず、実験にならない。ここでは、カササギに合わせて適切に実験をアレンジしたわけだ。

その結果、鏡を見せたときだけ、2羽が足やクチバシで赤や黄色のマークを擦り取ろうとしたのだ。黒いシールは羽の黒に紛れ、気づかないように擦らない。さらに赤や黄色のマークがあつても鏡がないとマークは見えず擦ろうとしない。つまり、この2羽は合格である。カラスは鳥の中で最も賢いといわれており、事実、脳のサイズは鳥類の中で際立って大きい。この論文が出たとき、自己認識能力は、3億年前まで遡つたともいわれた。哺乳類と恐竜（と鳥類）の祖先が分かれたのがこのころだからである。あるいは、前述のゾウの実験と同様に、カササギと類人猿の自己認識能力は、独立に進化してきただろうとも見なされた。いずれにせよ、記憶力が弱いなどとばかにされていた鳥類の知性が、再評価されることになるきっかけのひとつになったことは間違いない。

チンパンジーの鏡像実験を行ったギャラップ教授らは、鏡像自己認知ができるのは大型類人猿だけであるとの立場をとっており、それを現在（2021年）も崩していない。彼はイルカ、ゾウ、カササギでは研究の例数が少ないと批判している。当初イルカでは2頭が、アジアゾウで3頭中1頭が、カササギでは5羽中2羽がマークテストに合格しているが、これでは再現性がないと言う。これに対してチンパンジーはすでに100頭以上が実験され、そのうち約40%がマークテストに合格している。

さらに、カササギでは、シールをつけるという方法に問題があるかもしれないとする論文や、8羽で追試実験したが1羽も合格しなかったという論文が最近になってきた。c。鳥類では、オウム仲間、カラスのなかでも高度な道具の使用で知られるニューカレドニアカラスもマークテストに合格していない。ギャラップ教授は2021年の論文で、鳥類に鏡像自己認知の能力はないだろうと述べている。

実は、その他にもマークテストは様々な動物でなされている。しかし、そのほとんどで成功していない。研究例はいくらでもあるし、そもそも失敗例は、論文はもちろん学会発表もされないことはふつうであり、このため失敗例の実数はわからない。

マークテストが行われた身近な動物としては、イヌやネコが挙げられる。彼らは、まずはじめ鏡像を他個体と見なすようで、最初は攻撃的である。その後、鏡の裏を調べたりするし、鏡を何度も見せていると慣れてくるようだ。しかし、その先の段階に行かないのだ。マークを気にしないのである。ブタも今のところ鏡像自己認知の検証には成功していない。

しかし、これらの動物でも鏡の性質は理解しているのだ。鏡を使わないと見えないところに餌を隠した場合、鏡を見て正しく餌の場所を認識できるのだ。これには調べられたほとんどのサル類、イヌ・ネコ、ブタの他、オウムも含まれる。鏡は何かがわかっている、マークテストに合格しない。これは一体なぜなのだろうか。鏡がわかっても、自己認知ができないということなのだろうか。しかし、チンパンジーでも、全個体がマークテストに合格できるわけではなく、全体としての合格率は低い。同じ個体でもある年はできても、別の年にはできない。その理由はよくわかっていないのだ。

（幸田正典『魚にも自分がわかる―動物認知研究の最先端』一部改変）

問一 傍線部 A 「この結果」とあるが、この実験の対象となったチンパンジーの反応とその結果について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 鏡を見た当初は鏡像に攻撃的であったが、やがてそれが自分であると認識ができ騒がなくなつた。これにより、鏡像自己認知ができたことが示された。

イ 鏡を見た当初は鏡像に攻撃的であったため麻酔をされ、額に印をされた。そして麻酔が覚めた後、指で触りこの印の匂いを嗅ごうとした。これにより、鏡像自己認知ができたことが示された。

ウ 鏡像自己認知ができたと思われた後に麻酔をされ、額に印をされた。そして麻酔が覚めた後、鏡像を見た際に攻撃的でなかったことで、鏡像自己認知ができたことが示された。

エ 鏡像自己認知ができたと思われた後に麻酔をされ、額に印をされた。そして麻酔が覚めた後、鏡にうつるその印を触ったことで鏡像自己認知ができたことが示された。

オ 鏡像自己認知ができたと思われた後に麻酔をされ、額に印をされた。そして麻酔が覚めた後、自分の額の印を触ったことで鏡像自己認知ができたことが示された。

問一 空欄 

a
---

 に入る言葉として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア むろん

イ つまり

ウ しかし

エ むしろ

オ ゆえに

問三 傍線部B「他の霊長類」の自己認知能力について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 2500万年前までにヒト科と分かれたチンパンジーやニホンザルといったオナガザル科の霊長類は鏡像自己認知ができないことから、ギャラップ教授はこの能力が類人猿の段階で獲得されたものと考えている。

イ 小型類人猿は、「マークテスト」に合格する場合とそうでない場合がある。したがって、現在、世界の霊長類学者の多くは、ヒトの自己認識能力は大型類人猿の段階で初めて進化したと考えている。

ウ 相手の顔を凝視することのない「しきたり」を有するオランウータンは、幼い頃からヒトとコミュニケーションを取るようにしない限り、鏡像を自分のものであると認識する能力を身につけることができないと見なされている。

エ ギャラップ教授は、小型類人猿であるテナガザル類は「マークテスト」に合格しているが、その再現が困難なために、鏡像自己認知を認めることは難しいと考えている。しかし、筆者は彼の主張に懐疑的である。

オ テナガザル類は「マークテスト」に合格していないが、そのことが鏡像自己認知できないということに直結せず、実験方法を見直す必要があると筆者は考えている。しかし、この考えにギャラップ教授は否定的である。

問四 空欄  に入る言葉として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 当然

イ 重要

ウ 必然

エ 偶然

オ 自明

問五 傍線部C「2001年以降、霊長類以外でも、鏡像自己認知の検証例が出てきた」とあるが、これについて述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア フランス・ドウ・ヴァール教授は、鏡像自己認知能力が生物の進化の過程ではなく、ゾウ、イルカ、類人猿とヒトで、それぞれの社会の進化に応じて別々に発達したと主張している。しかしこれに、筆者は同意していない。

イ ローリ・マリノ教授らがハンドウイルカの鏡像自己認知の実験をプールで行った際、麻酔をおこなわなかったのは、動物園の水中でイルカに麻酔をすることが困難であったためである。

ウ ハンドウイルカに鏡像自己認知能力があることを示すには、イルカが直接見ることができない部分にマークを施したのち、すぐにイルカがそれを水中の鏡に見に行くことが求められた。

エ アジアゾウに実験を行う際には、動物園の飼育個体であることから死亡のリスクを避けるために従来とは異なる「マークテスト」を行うことで、鏡像自己認知の実験を成功することができた。

オ 2001年以降の実験から、哺乳類の中でもイルカ類とゾウという類人猿から遠く離れた系統に鏡像自己認知能力が認められたが、これらは生物の進化に応じて発達したとする考えに筆者は異議を唱えている。

問六 空欄  に入る文として最も適切なものを、次のア～カのうちから選びなさい。

ア ギャラップ教授はこれら偶然的検証論文を引き合いに出さざるをえない

イ 筆者がこれら否定的検証論文を引き合いに出さないわけではない

ウ ギャラップ教授がこれら肯定的検証論文を引き合いに出さないわけではない

エ 筆者はこれら偶然的検証論文を引き合いに出さざるをえない

オ ギャラップ教授がこれら否定的検証論文を引き合いに出さないわけではない

カ 筆者はこれら肯定的検証論文を引き合いに出さざるをえない

問七 次のア～オについて、本文の内容から正しいと判断できるものには a、間違っていると判断できるものには b、どちらも判断できないものには c をそれぞれマークしなさい。

ア ギャラップ教授によって1970年に発表された論文は、人間以外の動物も言語能力と自己概念を持つことをはじめて実証的に示すことに成功した。

イ すべてのチンパンジーが「マークテスト」に常に合格するわけではないが、その場合であつても鏡像自己認知能力を持つてると筆者は考えている。

ウ フランス・ドウ・ヴァール教授は、実験した個体の一部が「マークテスト」に合格したことからゾウには鏡像自己認知が可能であると主張するが、ギャラップ教授はこれについて批判的見解を主張している。

エ ギャラップ教授は、イヌやネコ、ブタなどが鏡の性質を理解できていることは認めているが、それらの自己認識能力が低いので、「マークテスト」には合格していないと主張する。

オ 鳥類の中でも際立って大きな脳をもつカラスの仲間であるカササギが自己認識能力を有することは、2008年に発表された論文によって科学者の共通認識となった。

### Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

「肥満」と聞いて良いイメージをもつ人は少ないだろう。ほとんど常に、怠惰や大食い、不健康、病気などのネガティブな意味づけがなされる。これは食欲の誘惑に負ける自己管理のできない、意志の弱い人というイメージからくるものだ。いわゆるダイエットに挑戦したことがある人であれば、継続できずに挫折してしまい、自分の意志の弱さを責めた経験が一度や二度はあるはずだ。そうした経験が、さらに太った人への偏見を **X**。

アメリカでは、一九七〇年代半ばから肥満者が急激に増加し、現在、人口の約四〇%以上が「肥満」カテゴリーに入ると言われる。肥満者の激増に注意を喚起し、肥満予防につなげようと、公衆衛生で頻繁に使われるようになった言葉が「肥満の流行」だ。この言葉は、肥満がまるで感染性の疾患のように急速に広がるというイメージを人々に植え付けた。確かに、そのイメージは、肥満のリスクについて人々に注意を促すという意味では効果があったのかもしれない。しかし、それ以上に、この言葉はショッキングで、太っている人をステイグマ化し、人々の不安感や恐怖を煽り、モラルパニックを引き起こした。食生活の自己管理で健康を管理できるという考えは、 **I**、太った人を、食生活を管理できない不健康な人だと非難しているに等しいからだ。

肥満差別というあまり馴染みのない差別概念に注目し始めたのは、二〇〇八年にファット・アクセプタンス運動についての研究に着手してからだった。この運動は、一九六〇年代後半に始まり、身体サイズや体重による差別の廃絶を訴え、意識・制度変革を目指している。だが、私がフィールドワークをし始めた頃、アクティビストたちは、四〇年近く経つてもいまだに肥満差別が差別として認められない現状にいらだちを見せていた。人種やジェンダー、性的指向に基づく差別が禁じられるのに対し、なぜ肥満差別は差別にならないのか。それは、肥満が意志の力で改善できると考えられているためだ。その考えは、<sup>A</sup>「肥満の流行」言説によってさらに勢い付いた。

メディアなどで「肥満の流行」が取り上げられる時には、大抵お決まりのストーリーがある。それは、西欧社会のライフスタイルが、無精で、大食いの肥満者を生み出したというもので、昔はこうではなかったのというノスタルジアと共に語られる。こうしたステレオタイプ化されたストーリーの矛先は、西欧社会の消費主義とそれによって出てきた怠惰な個人に向かう。アメリカでは、あらゆる手段でもっとたくさん買って食べると人々を追い立てる巨大な食品産業が、「肥満の流行」の原因を作っていると批判する人は多い。フードデリバリー、車、テレビのリモコン……自ら動かずとも楽に便利な生活が手に入る現代社会への批判が、誰も経験したことのない過去への望郷の念をかき立てるのだ。失われたものは何なのか。進化論は、時にそうしたストーリーを補強する格好の材料になる。

巷<sup>ちまた</sup>でよく目にする「人類進化の行進図」は、無数のパロディが作られ、人類進化が進歩であると

か、適者は優れた者であるといった誤ったイメージを人々に植え付けてきた。「肥満」と「進化」でインターネット検索をすると、いくつもの「人類進化の行進図」が出てくる。そのよくあるバージョンとして、左端には猿人が配置され、右端の太った人（手にフライドポテトや炭酸飲料を持っていることもある）へと至る「進化」が描かれる。

二〇〇七年にアメリカ合衆国のカリフォルニア州で見かけたサンドイッチのチェーン店の広告もその一つで、俗流の進化論をうまく利用したものだった。よくあるバージョンからは変化が加えられていて、左側にいる体型の人が、右側に「進化」するにつれどんどん太っていき、一番右で再び「健康的」な体型に戻るといったものだ。その下には「健康の進化は始まった。」とある。この「人類進化の行進図」の広告を無批判に見るならば、人類は太ってきたが、健康的な食（もちろん、広告ではサンドイッチ、となるが）を選択すれば、痩せられるというメッセージが読み取れる。

しかし、批判的な読みをするならば、この広告には二つのメッセージが巧妙に混じり合っている。一つには痩せていることが適者であるというメッセージ、二つめは食にあふれた環境に打ち勝てるのは意志の力に基づいた行動だというメッセージだ。つまり、一番右の痩せている人間こそが意志の力で「正しく」進化した適者であると同時に、左四人は「間違った」進化であることが示されている。四人の「間違った」進化と五人目の「正しい」進化の色が違えてあるのは、断絶を強調するためだろう。もちろん、ここで言う「正しい」進化とか「間違った」進化は、今の時代の価値観を投影した通俗的な理解であるのは言うまでもない。

ところで、肥満を進化の視点で学術的に理解する時に、進化的説明の定番として必ずと言っていいほど登場する仮説が、<sup>B</sup>儉約遺伝子説である。ときおり起こってきた飢饉が、進化の過程で、脂肪の蓄積を促すような淘汰圧をもたらしたという考えだ。一九六二年にアメリカの遺伝学者であるジェイムス・ニールが、インスリン抵抗性という現象を適応という視点から説明するために提唱した仮説だ。人類が誕生してから、十分に食物を食べられるようになったのはほんの五、六〇年ぐらゐのことだと言われている。それまで、ホモ・サピエンスは食料が豊富な時には身体に脂肪を蓄え、万が一の飢餓に備えていた。その結果、飢餓の恐れがない社会であっても脂肪を溜め込んでしまうのだというものだ。

左四人は、この儉約遺伝子説を根拠にした「進化」の道を表している。環境が変わり食物獲得に苦勞しなくなり「肥満の流行」へと至るのだ。ところが、左から五人目は、環境に「適応」して「正しい進化」に戻る。ただしその「進化」は遺伝的なものではなく、食にあふれた環境の誘惑に打ち勝った個人レベルの意志の力に基づく行動の結果なのだ。つまり、この広告には、環境の変化で変わってしまった人間の体型を、意志の力に基づいて変える「進化」の道が表されている。厳密に言えば進化ですらないが、このような図として並べることで、まるで「進化」であるかのように見えてくるから不思議だ。

吉川が言うように、私たちは、適者とは適したものののだという自然淘汰の原理を、まるで導かれるように勝手な価値観に基づいて理解する。ことあるごとに適者を強者や優者とすりかえ、勝者や敗者があらかじめ決まっているかのように誤解するのだ。そこには、適者が競争を通じて生き残っていくはずだという、今の時代の希望が投影されている。

もちろんこれは、学術上の適者生存の原理の理解とは、全く異なる。進化には正しいも間違いないもなければ、目的もない。したがって、この広告を通俗的な進化論だと笑い飛ばすことも可能かもしれない。しかし、通俗的な自然淘汰の世界観が、進歩、改良、向上を前提としているのであれば、それは同時に、太っている者は進歩していないという見方を補強する。描かれたのが仮に人種であれば絶対に許されないが、肥満だと許容される。 2、うまい広告だとさえ思つかもされない。それは、(二〇〇七年の時点で) 肥満差別という概念自体が存在していないことを示している。

人類史が食料獲得をめぐる歴史だったことを考えれば、確かに私たちの身体には、長い進化のなかで、狩猟採集の環境に適応することで培われた特性が埋め込まれているだろう。それゆえ、近年の「肥満の流行」という現象を、進化論をメタファーに説明したくなるものだ。「肥満の流行」という言葉を作り出した公衆衛生の視点は、常に人口という単位において意味を持つ。この視点は、ヒトという種を捉えるマクロな視点と共鳴しやすいのかもしれない。

この「肥満の流行」言説は、太った人をステイグマ化しモラルパニックを引き起こすことで、人を痩せさせようとするものとして機能する。進化論のメタファーは、このとき、人間集団の質的向上を目的に、優良な遺伝形質の保存・改善を目指す優生学的な思考への接近を強く連想させる。ここで、肥満差別は優生思想から生まれるとあえて強く言い切ってみることで、意志の力の効力が見えてくる。つまり、かろうじて、それが優生思想にならないのは、肥満は意志<sup>C</sup>の力で改善できるのだという方便によって、自己責任の問題へと回収されるからである。裏を返せば、意志の力を挿入することで、どうにか優生思想批判を免れようとしているようにも思える。

街なかが高く掲げられた肥満の「人類進化の行進図」の広告は、痩せた者こそが優れた者だというイメージを無批判に植え付ける。この「行進図」が肥満差別にならないのは、そこに意志の力で減量できるという主張が控えているからだ。狩猟採集社会にもはや戻ることはできない今、行動を制御して、自分の環境を改変する意志の力を持つしかない、と。

失われた狩猟採集の環境を、自己の意志の力で作り出すという解決策が提示されるとき、メタファーとしての種レベルの生物進化の話は、いつのまにか個人レベルの意志の力の問題へとすり替えられる。そこにねじれが生じる。しかし、何度挑戦しても痩せられないという理不尽な経験を意志の力が不足していたからと納得することで、我々はそのねじれを引き受ける。

最近では、現代の「肥満の流行」は、過去における進化的適応と、現代の環境とのミスマッチによって起こっていると説明が主流だ。脂肪の蓄積は、摂取カロリーが消費カロリーを上回るこ

とによって起こるとされる。よって、シンプルに考えるならば、「肥満の流行」はカロリーの過剰摂取の理論的な帰結と言える。なぜカロリー摂取が過剰になったかという、環境が変化したからだというのがミスマッチ・パラダイムの要点である。

人類の身体は、食料獲得のために激しい労働をしなければならない狩猟採集の環境において進化してきた。しかし、その後人類は短期間で自身の生きる環境を大幅に改変した。アメリカや日本に住む私たちは、日々多彩で美味しい食べ物を楽しむ。食物にいつありつけるかもわからず、ありつけたとしても食材も調理法もシンプルだった時代と比較すると、食べること自体が多くの面で変化したことは確かだ。進化の視点でこのことを理解するならば、人が太り始めたのは、人類が進化のなかで獲得した特性と、現代の環境との間の齟齬によるものだ。

ここで重要なのは、「肥満の流行」を説明する力点として、環境が強調されるようになってきたということだ。環境が「肥満の流行」を招いていることを表す言葉として、近年、公衆衛生などの分野で使用されるのが「肥満をまねく環境」という言葉である。「肥満をまねく環境」とは、新鮮な食品を売るスーパーマーケットなどが無く、砂糖入り飲料が他の飲料に比べて非常に安価で手に入りやすく、子どものための安全な遊び場、公園や歩道、自転車用道路がない、そのような環境を指す。特に、貧困と肥満問題が結びつけられて語られるとき、こうした環境に住んでいる低所得者層は環境の犠牲になりやすいことが問題とされる。こうした背景から、人々の食べる環境に介入することで、「流行」を食い止めようとする公衆衛生の取り組みが出てくる。昨今、特に注目されるのが、脂肪や糖分の多い食品や、砂糖入り飲料を制限するための介入政策である。しかし、環境への介入は意志の力の放棄を意味しない。

カリフォルニア州の公衆衛生関係の施設で調査をしていた二〇〇八年六月、私は、**Soda Free Summer** というアラメダカウンティの公衆衛生のキャンペーンのイベントに参加した。このキャンペーンでは、炭酸飲料に含まれる大量の砂糖が肥満の増加に繋がっているという前提のもと、炭酸飲料を減らすための活動が行われていた。当日は、いわゆる低所得者層が住む団地の広い庭で行われた。家にある炭酸飲料を持参した子どもたちが、毒と書かれた大きなタンクに缶中のジュースを捨てた後、レモン水を飲む、という劇場型のイベントだった。おまけに、くじを引いて運動不足解消のためのおもちゃを当てる、という楽しそうな催しまでつく。

会場には、炭酸飲料を含む飲料のカロリーや砂糖の含有量をリスト化したポスターや、「私たちが体に取り入れる砂糖の量は、体重と体内で生成されるインスリンの量に影響します」などと書かれたポスターが貼られたパネルがあちこちに設置されていた。私が話を聞いたアラメダカウンティの関係者は、カリフォルニア州ならではの、素晴らしいキャンペーンだと自負した。

そんななか、子どもたちが炭酸飲料を一斉にタンク缶に流し込み始めた。しぶきがあがり、それが自分の顔にかかった子どもたちは歓声を上げた。この瞬間は楽しそうだった子どもたちは、大人

たちに誘われてレモン水のコーナーに移動する。子どもたちが去った後の地面に打ち捨てられた空き缶を見た私は、かれらから炭酸飲料を今日だけ奪うことに、いかなる意味があるのだろうかという複雑な思いに駆られた。

肥満問題を貧困に見だし、肥満予防の介入をすることに対しては批判もある。この介入の構図自体が、自己管理ができる「優れた」ミドルクラス以上の白人と、自己管理ができない「劣った」マイノリティという印象を喚起する。介入することで、白人の規範的身体や食の道徳を、パターナリスティックなやり方で押し付けているのではないかというのだ。また、積極的な介入政策は、個人の食の選択や体型という私的な領域に干渉する。これは身体の多様性を保持したまま健康になるという権利を奪っているに等しいのではないかという批判もある。

炭酸飲料を捨てさせるという「暴挙」が問題にならないのは、センセーショナルな形ではあれ、今後は自分の意志の力で行動を制御せよというメッセージが含意されていることを、皆が納得しているからだ。そして、ここで再び、個人の意志の力が浮上してくる。誘惑の多い環境に打ち勝つために、最終的には個人の意志の力が要請されることで、再び肥満差別は不可視化される。太った個人が<sup>おとし</sup>蔑められ軽蔑されるとしても、意志の力で「改善」できるはずだし、健康のためだから仕方がないのだと甘受するほかない。結局のところ、こうした考えを容認せざるをえないことにこそ問題の核心があるのではないか。

(碓陽子「肥満の流行」とメタファーとしての「進化」―食べることを救い出すために― 一部改変)

問一 空欄  ・  に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- |           |         |
|-----------|---------|
| 1 ア 裏を返せば | 2 ア いわば |
| イ 文字どおり   | イ むしろ   |
| ウ あるいは    | ウ ただし   |
| エ 少なくとも   | エ しかし   |
| オ 意図的に    | オ つまり   |

問一 空欄  X に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 誤解する
- イ 醸成する
- ウ 非難する
- エ 期待する
- オ 拒否する

問二 傍線部 A 「肥満の流行」言説」とあるが、この言説について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 西欧社会のライフスタイルが、無精で大食いの肥満者を生み出した原因である。
- イ アメリカでは、巨大な食品産業が「肥満の流行」の原因を作っている。
- ウ 「肥満の流行」言説は、楽に便利な生活が手に入る現代社会への批判に繋がっている。
- エ 西欧社会の消費主義と怠惰な個人が、「肥満の流行」言説の批判対象である。
- オ 人類が太ってきたことは、進化の結果として自然環境へ適応した証拠である。

問四 傍線部 B 「儉約遺伝子説」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 儉約遺伝子説は、ジェイムス・ニールが提唱し、一九五〇年代以前のアメリカではひろく受け入れられていた仮説である。
- イ 儉約遺伝子説は、人類は飢餓の恐れがあるような絶食を選択すれば容易に痩せられるように進化してきたとする仮説である。
- ウ 儉約遺伝子説は、食料が豊富な時には身体に脂肪を蓄えていたホモ・サピエンスは飢餓を経験しなかったとする仮説である。
- エ 儉約遺伝子説は、インスリン抵抗性を獲得するまで、食料が豊富であった人類は肥満に苦しんでいたとする仮説である。
- オ 儉約遺伝子説は、飢餓の恐れがない社会でも人類は万が一の飢餓に備えて脂肪を溜め込んでしまうとする仮説である。

問五 傍線部C「意志の力」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを一つ選びなさい。

- ア 人類のうち、意志の力でインスリン抵抗性をもった少数の人々が適者として認識される。
- イ 意志の力で肥満した者こそが、進化した、優れた者だという虚構が人々に定着している。
- ウ 人々は肥満が自己責任であると認識し、自らへの肥満差別を意志の力で乗り越えている。
- エ 種レベルの生物進化のメタファーが個人レベルの意志の力の問題にすり替えられている。
- オ 「肥満の流行」言説は、意志の力を介在させて優生思想批判を回避しているようにみえる。

問六 傍線部D「肥満をまねく環境」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 子どものための安全な遊び場、公園や歩道、自転車用道路がないなど、特定の都市環境に住む低所得者層は、一般的に肥満になりにくい傾向が見られる。
- イ 貧困と肥満問題が結びつけられて語られる一方で、食べる環境に介入することは低所得者層が意志の力を放棄することにつながると批判されている。
- ウ 低所得者層は環境の犠牲になりやすいため、脂肪や糖分の多い食品や、砂糖入り飲料を制限して肥満の流行を食い止める介入政策がとられることがある。
- エ 自己管理ができるミドルクラス以上の白人に対し、肥満を助長するような環境に住むマイノリティは、自己管理ができないと見なされている。
- オ 人々が身体の多様性を保持して健康になるためには、政府に対して、食の選択や体型という私的な領域への介入政策を認める必要がある。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

- ア 欧米のメディアによれば、「肥満の流行」の主たる原因は、あらゆる手段でもっとたくさん買って食べると人々を追い立てる巨大な食品産業である。
- イ 「人類進化の行進図」の広告が示すように、だれが進化論的な勝者や敗者であるかは、あらかじめ決まっている、と筆者は考えている。
- ウ ミスマッチ・パラダイムによれば、環境が変化し、摂取カロリーが消費カロリーを上回ることによつて「肥満の流行」が起こっている。
- エ 適者生存の原理によれば、個人レベルの意志の力によつて、人類は食にあふれた環境の誘惑に打ち勝ち、肥満を克服することができる。
- オ 筆者によれば、肥満は意志の力で「改善」すべきという考えを人々が容認することにより、「肥満の流行」言説をめぐる問題の核心がある。